

- 一 問一 a 組織 b 浴び c 姿 問二 背中 問三 老若男女  
 問四 食べることが、それまで自分の体を構成していた分子が、食べられたものを構成していた分子と置き換わっていく過程であると知ったことについて、信じられないことが起こっているという驚きと感動。  
 問五 食卓に並ぶ食材は三五億年前から一度も減びたことがない、同じ地球環境の下にあった「生命」の異なる表現であり、宇宙と生命の歴史の表現であると考え、そのスケールの大きな認識とこの世の生態学的な豊かさに感動と喜びを覚えるから。  
 問六 現在の社会は自然の圧倒的に潤沢な富をお金を払わなければ買えない商品に変えてしまう。しかし、人間の生活が、自然からもらい、拾うことを前提にしていることを忘れず、「自然からの純粋な贈り物」に対する驚きと感謝の経験を通して、物を贈り合う連鎖の一員になってほしいものだ。
- 二 問一 〈例〉 a 森林 b 情報 c 重量  
 問二 〈例〉 ア 黄色い イ 大きい 問三 助け舟（助け船）  
 問四 (1) あなたと私は、激しく対立し、ぶつかり合うこともあったが良きライバルであった。そんな大切なあなたが死んでしまったことが、残念でならない。  
 (2) 独楽の句は、友だちとの関係を見事に表現した挨拶句である。大地のパワーを集めて咲くヒマワリの、そのおおもとである種を詠んだ挨拶句を新たな友だちであるソラに贈るつもりであったが、失敗し、ソラを傷つけてしまった。謝罪の気持ちとともに自分の力量不足を嘆いている。  
 問五 ホクロを詠んだ句には腹を立てていたが、ハセオに悪意があったとは思えない。俳句が好きなハセオが俳句を擲擲うためや馬鹿にするために使うはずがないこともわかっていた。心の中では許していたが、直前のハセオとのやりとりを通してハセオがすでに友だちであることに気づき、喜ぶとともに仲直りできると安心している。  
 問六 てのひらの中のヒマワリの種は、自分にとってハセオとの友情を確認するきっかけとなったものであり、この友情を大切にしたいと思っている。

## 解 説

- 一 出典は、森田真生「僕たちはどう生きるか 言葉と思考のエコロジカルな転回」〈集英社〉。
- 問四 「食えること」を「緻密に調べてみると」どのようなことがわかるのか——1頁上段22・23行めに「緻密に調べてみると、食えることは、文字通り自分の身体の一部が、食べられたものに置き換わっていく過程であることがわかった」とあります。それに続く段落で「えんどう豆や魚やリングを構成していた分子が、それまで自分の身体を構成していた分子と置き換わっていく」とより具体的に説明しています。このことを「想像以上にシュールなこと」と筆者は評しています。「シュール」とは、「表現や発想が非日常的であるさま」と注にあります。「非日常的」なことに接したときの「気持ち」に言い換えます。
- 問五 ——線部②直後の段落冒頭で「僕は自宅で食事をするとき、食卓に並ぶ食材を生み出してきたあらゆるものの生態学的な連関を、なるべく詳細に想像してみようとする」と述べ、「想像」する具体的な内容が次の段落にかけて書かれています。海、大気、土、太陽の光——自然の恵みを受けて豊かに育つ食材、「それぞれが別の進化の来歴をたどってきた動物や植物や鉱物たちが、いまこの食卓の上で共演している。」と35億年の進化の歴史にまで視野を広げます。そして1頁下段1行めからの段落で、「食卓に並ぶ食材」を「宇宙と生命の歴史の表現」とまとめ、「何気ない食事の場面から、あらゆるスケールに認識がはみ出し、この世の生態学的な豊かさに、感動としみじみとした喜びを覚える」としめくくっています。「愉快で、壮大」だと筆者が述べる理由がここにあります。

問六 「もらう」こと、「拾う」ことという経験が子どもたちの成長にどう関係するのかを読み取ります。「現在の社会のあり方をふまえて」という条件については、——線部③直後の段落冒頭の「自然の圧倒的に潤沢な富を、僕たちの社会はお金を払わなければ買えない商品に変えてしまう」に着目します。このような現在の社会で失われてしまったのが、「人間の生活の前提にあった」「自然からもらい、拾いながら生き」「自然から与えられる」という経験です。『『こんなにもらってしまった』という驚きと感動の経験』を通して、商品経済におおわれてしまった現在の社会が失った「物を贈り合う連鎖」の一員として成長するだろうと考えています。「物を贈り合う連鎖は、～動き出すのではないだろうか」という表現から、「物を贈り合う連鎖」が「動き出す」ことを筆者が期待していることがわかります。

二 出典は、高柳克弘「そのことばが降ってくる 保健室の俳句会」〈ポプラ社〉。

問二 「ヒマワリだったら、【ア】とか【イ】とかは、当たり前だろ」という文脈です。ヒマワリについて想像したとき「当たり前」と言えることを考えます。「黄色い」「大きい」などが考えられます。

問四 (1) 句の直後で「～これ、死んじゃった友だちっていうか、ライバルに贈った、まあ、一種の挨拶句なんだけどさ、コマがばちばちって戦うような二人だって言っててさ～」と、内容を読み取るうえでヒントが書かれています。喧嘩独楽が激しくぶつかりはじき合うように、激しく対立してぶつかりあう良きライバルであった一方が亡くなり、その死を悼む思いで詠まれた句です。高浜虚子が亡き友・河東碧梧桐に贈った追悼の句。

(2) 「——線部①の句と比べて」ハセオの句がどうであったのか、という比較をしたうえで、ハセオの気持ちを読み取ります。ハセオが「カッコいいと思うんだよな」と言うとおりの——線部①の句は、良きライバルであった二人の関係を見事に表現した挨拶句になっています。それに比べハセオの句は、ソラを傷つけ、怒らせてしまう失敗作でした。大地のパワーを集めて咲くヒマワリの、そのおもとである種を詠んだ挨拶句を新たな友だちであるソラに贈る意図とは裏腹の結果を招いてしまいました。——線部①の直前の10行程の部分で「下手くそ」とハセオは連呼しています。同一部分に「ハセオは、話しているうちに、ソラに謝っているというよりも、自分の俳句の下手さにしょげているようになった」とあります。また、3頁下段3・4行め「コイツ、どれだけ、俳句好きなんだよ。／ソラに謝っているのか、自分の力量不足を嘆いているのか」とあります。わざわざソラの家を訪ねてきたのは、謝罪のためです。しかし、今回の失敗の原因が自分の力量不足にあることは明らかであり、それを嘆いているのです。

問五 「もう、いいよ」というハセオを許す言葉が「すでにソラの中であって、出るのを待っていた」という文脈です。——線部③直後「ハセオが、悪意で、ああいう句を作るやつじゃないことは、わかっていた。こんなに俳句が好きなハセオが、俳句を、揶揄うためや、馬鹿にするために使うはずはない、ということ。」ハセオのことを理解していることがわかります。そして、——線部③の直前で気づいたこと。「友だちが死んだときに詠まれた句を例にあげるなんて、不吉じゃないか。友だちの前で——／そこまで思って、ソラははっとした。／そうか、僕にとっては、ハセオはもう友だちなんだ。」意識はされていなかったが、すでにハセオのことを許していた、すでに友だちとして向き合っていたことに気づきます。友情の確認がソラの心に何をもたらしたか——喜びとともに、これで仲直りできるという安堵感があったことでしょう。

問六 一時は仲違いの“種”となったヒマワリの種でしたが、ハセオとは仲直りでき、その過程で、自分でも気づかぬうちにハセオを友だちとして認めていた自分を発見します。てのひらの中のヒマワリの種は、ハセオとの友情を確認するきっかけとなった“記念品”とも言うべきものです。それを「取っておく」という言葉は、ハセオとの間の友情を大切にしたいという思いから出た言葉にほかなりません。種はやがて芽を出し、茎をのばし、花を咲かせる、そのおもとにあるもの、というハセオの言葉を思い出すと、今始まったソラとハセオの友情が、さらに強い絆となっていく可能性を、この最後の言葉に読むこともできるでしょう。

\*追記 一・問二「背中（合わせ）」、二・問三「助け船（を出す）」などの慣用表現、一・問三「老若男女（四字熟語）」など基本的な知識を問う問題が目につきました。漢字の書き取り、熟語作りの問題と合わせると10～15点くらいの配点です。「四科のまとめ」などを活用し、基本的な知識の定着を図りましょう。